

研究主題

**基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させる指導の工夫  
（1年次）**

目 次

第1	研究の概要	76
第2	研究の背景とねらい	77
1	研究の背景	77
2	研究のねらい	77
第3	研究の方法	77
1	研究の方法	77
2	研究の体制	78
3	研究の経過	78
第4	研究の内容	78
1	基礎研究	78
(1)	基礎的・基本的な知識・技能について	78
(2)	学力に影響を及ぼす要因について	79
(3)	自尊感情や自己肯定感と学力との関係	81
(4)	学力低位層の把握	81
2	事例研究	83
(1)	事例研究に当たって	83
(2)	自尊感情測定尺度【東京都版】を用いた調査結果から明らかになったこと	84
(3)	対象児童・生徒の個別事例について	85
(4)	聞き取り調査の結果について	94
(5)	事例研究のまとめ	94
3	提案	96
(1)	状況把握の方法	96
(2)	状況把握を生かした授業改善	97
(3)	組織的な取組	97
第5	研究の成果と今後の課題	98
1	研究の成果	98
2	今後の課題	98
○	参考文献・資料等	100

＜研究の成果と活用＞

1 研究の成果

研究協力校における学力低位の児童・生徒を対象に、活動状況の把握及び教員への聞き取りを行い、学力低位の児童・生徒の状況を把握する方法と個に応じた指導の手だてを提案した。

2 研究成果の活用

本研究で用いた児童・生徒の活動状況を把握する方法を基に、校内研修会等において複数の教員が対象児童・生徒を観察し共通理解を図り、個に応じた指導に役立てることができるようになる。

第1 研究の概要

基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させる指導の工夫（1年次）

研究の背景

東京都の課題

基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるとともに、児童・生徒の学ぶ意欲を高め、学習習慣を身に付けさせ、主体的に学習できる力を培うことが必要である。

東京都の施策

- ・児童・生徒の学力向上を図るための調査
- ・児童・生徒の学習のつまづきを防ぐ指導基準（東京ミニマム）
- ・学力向上パートナーシップ事業
- ・東京ベーシック・ドリル
- ・東京方式習熟度別指導ガイドライン

研究のねらい

学習への関心や意欲を高め、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるために必要な児童・生徒一人一人の状況を把握する方法及び指導や支援の方法を提案する。

1年次

研究の方法と内容

**基礎研究** 先行研究や各種調査から情報を収集し、整理する。

- 1 基礎的・基本的な知識・技能とは何か
- 2 東京都における児童・生徒の学力に関する現状把握
- 3 学力に影響を及ぼす要因

**事例研究** 児童・生徒一人一人の状況を把握する。

- 1 対象児童・生徒の活動状況把握及び教員への児童・生徒についての聞き取り
- 2 管理職への学力向上に関する組織的な取組についての聞き取り
- 3 自尊感情測定尺度【東京都版】を用いた対象児童・生徒の自尊感情の調査

**提案** 個に応じた指導の工夫

- 1 状況把握の方法
- 2 状況把握を生かした授業改善
- 3 組織的な取組

2年次

- 小学校・中学校の発達段階に応じた指導や支援の実践事例を提案し、検証する。
- 組織的な個に応じた指導の体制の取組を行う。

研究成果の活用

- 教育課題研究会で研究成果報告
- 指導資料の作成・配布
- 研究紀要の作成・配布

## 第2 研究の背景とねらい

### 1 研究の背景

平成26年度「全国学力・学習状況調査」の結果から、東京都の児童・生徒は、全都道府県の中で上位3割以内のグループに位置しているが、学力上位の他の県と比較すると、下位層の児童・生徒の割合が多いことが報告されている。このことから、当該学年で学習する内容を十分に理解しないまま進級し、次の学年での学習に支障を来している実態が考えられる。

東京都教育委員会では、教育目標にある「自ら学び考え行動する、個性と創造力豊かな人間」の育成に向けた教育を重視し、「東京都教育ビジョン（第3次）」（平成25年4月策定）の取組の方向1「学びの基礎を徹底する」主要施策の第一に、「基礎・基本の定着と学ぶ意欲の向上」を位置付けている。このことを受け、「児童・生徒の学力向上を図るための調査」、「学力向上パートナーシップ事業」の実施や「東京ベーシック・ドリル」の活用等、重点教科を中心に、学力の定着に課題の見られる児童・生徒に対する効果的な指導法を開発し、習熟度別指導等を推進するなど基礎的・基本的な事項の定着を図っている。

各学校では、児童・生徒の学力の実態に応じた「授業改善推進プラン」を作成し、確かな学力の定着と伸長に向けた取組を実践できるよう組織を挙げて取り組んでいる。さらに、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けさせるため、習熟度別指導、分からない箇所に戻れる指導、分かるまでの繰り返しの指導を徹底している。

今後も、東京都の公立学校に在籍する全ての児童・生徒が、基礎的・基本的な知識・技能を習得できるようにするため、学力の定着に課題の見られる児童・生徒の状況を把握し、つまずきの要因を探るとともに、一人一人の児童・生徒の理解に応じたきめ細かな指導や支援の工夫が求められる。

### 2 研究のねらい

学習への関心や意欲を高め、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるために必要な児童・生徒一人一人の状況を把握する方法及び指導や支援の方法を提案する。

## 第3 研究の方法

### 1 研究の方法

基礎研究として、基礎的・基本的な知識・技能について確認した上で、東京都における児童・生徒の学力に関する現状の把握、学力に影響を及ぼす要因等について先行研究や文献等を中心に調べ分析した。

次に、事例研究として、学力低位の児童・生徒一人一人の実態を詳細に把握するため、学力調査の結果に加え、自尊感情測定尺度【東京都版】を活用して自尊感情を測定し、活動状況把握や教員から対象児童・生徒についての聞き取りを行うことで、学習面だけではなく様々な角度から情報を集め、児童・生徒のつまずきの要因を分析した。また、管理職からは、学力向上に関する組織的な取組について聞き取りを行った。

事例の分析に当たっては、特別支援教育の視点を用いた活動状況の把握を通常の学級での授業改善に生かすために、特別支援教育を専門とする指導主事が加わった。

基礎研究及び事例研究を基に、つまずきの要因に対する個に応じた手だてを考え、「状況把握を生かした授業改善」、「組織的な取組」の二つの視点で手だてを整理した。

## 2 研究の体制

研究部会を組織し、東京都教職員研修センター統括指導主事3名、指導主事5名及び教員研究生6名が所属した。原則、毎月2回の部会を開催した。

東京都教育委員会では、学力向上のための施策として、「児童・生徒の学力向上を図るための調査」及び「学力向上パートナーシップ事業」等を実施している。平成25、26年度に行われている「学力向上パートナーシップ事業」は、都内の重点中学校区の学校（中学校1校と近隣の小学校1～3校）を調査研究校として指定し、所管の教育委員会と協力して、学力の定着に課題の見られる児童・生徒への効果的な指導方法の開発に資する研究に取り組んでいる。そこで、事例研究を行うに当たって、「学力向上パートナーシップ事業」における調査研究校に協力を依頼し、4校を研究協力校として指定した。

## 3 研究の経過

平成26年 4月	第1回 研究部会の発足（月2回）
平成26年 10月	学力向上パートナーシップ研究協議会（参加）
平成26年 11～12月	研究協力校の対象児童・生徒の活動状況の把握及び対象児童・生徒に関する教員への聞き取り等の実施
平成27年 1月	学力向上パートナーシップ研究協議会（参加）
平成27年 2月	教育課題研究発表会の実施〔2月17日〕

## 第4 研究の内容

### 1 基礎研究

#### (1) 基礎的・基本的な知識・技能について

「基礎的・基本的な知識・技能」は、「思考力、判断力、表現力等」や「主体的に学習に取り組む態度」とともに学力の三要素として、学校教育法第30条第2項（平成18年改訂）に位置付けられている。「基礎的・基本的な知識・技能」という文言は中央教育審議会答申（平成20年1月）にも明記され、その後現行の小学校及び中学校学習指導要領（平成20年3月告示）に反映されている経緯がある。

東京都教育委員会では、「基礎的・基本的な知識・技能」の内容に関連する資料である「児童・生徒の学習のつまずきを防ぐ指導基準 東京ミニマム（改訂版）」（東京都教育委員会平成22年3月）を示している。これは、児童・生徒の学習のつまずきを防ぐために、「学習の素地として確実に身に付けさせておく必要がある資質・能力」を明らかにしたものである。国語科については、「知識・理解・技能」、「言葉を使いこなす力」、算数・数学科については、「知識・技能」、「考え方」とし、資質・能力の具体的な要素を設定している（表1）。

国語科	<b>知識・理解・技能</b> ○文のつくり ○語句 ○話し方 ○文章のつくり ○言葉遣い ○文字	<b>言葉を使いこなす力</b> ○話題を捉えて話し合う力 ○書く事柄を明らかにする力 ○文章を組み立てる力 ○文章を見直す力 ○大体の意味を捉える力 ○文章を読み、考える力
-----	--	---

算数科・ 数学科	知識・技能 ○繰り下がりのあるひき算 ○かけ算      ○測定の技能 ○作図          ○式の意味の読み ○比例          ○正の数・負の数の理解 ○文字を含む式の計算 ○分数	考え方 ○数のいろいろな見方 ○計算の見積り ○量の大きさについての見当付け ○いろいろな観点からの図形の見方 ○変化の様子への着目 ○割合の見方
-------------	---	---

表1 学習の素地として確実に身に付けさせておく必要がある資質・能力（出典：東京ミニマム）

また、小学校学習指導要領総則では、言語活動を充実させ、問題解決的な学習展開を意識して行う中で、「基礎的・基本的な知識・技能」を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成し、主体性を身に付けていくこととしている。「基礎的・基本的な知識・技能」については、例えば、小学校算数科の第5学年で学習する「小数のかけ算とわり算」では、計算の仕方について数の相対的な見方や計算の性質を生かして考えることが求められる。しかし、当該学年までに「数の相対的な見方」の基になる考え方が児童に身に付いていなければ、この学習のつまずきの要因になると言える。このように、児童・生徒が、当該学年で確実に身に付けておかなければ、その後の学年において学習を行う際につまずきの要因になるとされる知識・技能がある。

そこで、本研究における基礎的・基本的な知識・技能を以下のとおりとした。

**学習の素地として確実に身に付けさせておく必要がある知識・技能**

(2) 学力に影響を及ぼす要因について

国や都の学力調査結果、都内及び他道府県における教育委員会を中心とした学力向上に関する取組や研究等について調べたところ、全国学力・学習状況調査の結果等から、児童・生徒の学習・生活習慣、家庭学習の状況及び学校における指導等と学力との間にいずれも関係があることが分かった。

学習に対する関心・意欲・態度、読書、学習時間、基本的な生活習慣、自尊感情・規範意識などの項目で、肯定的な回答又はその時間が長いと回答した児童・生徒ほど学力が高い傾向があることが確認された。具体的には、「家で学校の宿題をしている」、「朝食を食べている」、「学校に持っていくものを前日か、その日に確かめている」などの生活習慣、学習習慣に関する項目は学力との関係が特にある。

学校の組織的な取組としては、「学習規律の徹底」、「学校と家庭・保護者との関係」や「子供の学習習慣」、「自尊感情」、「規範意識」、「社会や地域への関心」等に学力との関係が見られた。そして、結果分析においては、「学習の課題を与える」、「振り返りを行う」などの指導上の取組が、学力向上に有効だとされている。

また、「自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導」、「考えを引き出したり思考を深めたりする指導」、「適切にノートをとるなど、学習方法に関する指導をしている」などの取組は、我が国の児童・生徒の課題とされている記述式問題の無解答率の減少に効果があると言われている。その他にも、「考えを引き出したり思考を深めたりする指導」、「私語をしないなど、学習規律の維持を徹底」、「家庭学習の継続的な習慣付けを図るために家庭と協力すること」などが学力向上に有効だとされている。また、各学力



層に効果的な指導方法が異なる可能性が明らかにされている。例えば、学力低位層を減らすのに効果があるとされている方法としては、「国語の指導において書く習慣を身に付ける授業」、「学校図書館を活用した授業」、「放課後を利用した補足的な学習サポート」などがある。

さらに、個に応じた指導の一つとして習熟度別少人数指導の効果が言われており、学力低位層の学習において関心・意欲・態度を高める効果や、学力低位層を減らし、学力が高い層を伸ばす効果があることが確認されている。特に、学力低位層の正答率を上げ、無解答率を下げる傾向があることが明らかになっている。また、学力低位層の自尊感情を傷付けたり、学力が高い層の自尊感情を歪めたりしないことも分かった。

「小学校学習指導要領 総則 第1章第4の2(6)」では、各教科等の指導に当たっては、児童が学習内容を確実に身に付けることができるよう、学校や児童の実態に応じ、個別指導やグループ別指導、繰り返し指導、学習内容の習熟の程度に応じた指導、児童の興味・関心等に応じた課題学習、補足的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れた指導、教師間の協力的な指導など指導方法や指導体制を工夫改善し、個に応じた指導の充実を図ることとされている。

また、OECDが国際分析において背景要因として挙げているものには、数学の学習に関する要因（数学における興味・関心や楽しみ、道具的動機付け、自己効力感、自己概念、不安）の他、学級の雰囲気や学校の雰囲気、児童・生徒と教師の関係がある。この他にも、成績を規定する要因として、授業時間、生徒の社会・経済・文化的背景、学校規模、学級規模、課外活動、入学に際しての学校の方針など、学校内外の様々な要因が挙げられている。

以上のように、様々な要因が学力に影響を及ぼすことが示されているが、文献や先行研究を基に、学力と関係のある要因について以下のとおりまとめた（表2）。

項目	学力と関係のある具体的内容
関心・意欲・態度	・国語、算数・数学への関心・意欲・態度が高い。
読書	・読書が好きで、読書時間が長く、学校や地域の図書館に行く頻度が多い。
学校生活	・学級で協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある。 ・先生は、自分のよい所を認めてくれていると思う。
基本的な生活習慣	・朝食を毎日食べる。 ・毎日、同じぐらいの時刻に寝る。
メディアとの関係	・携帯電話やスマートフォンで通話する時間が短い。 ・メール、インターネットをする時間が短い。 ・ゲームをしている時間が短い。
家庭でのコミュニケーション等	・家の人と学校での出来事について話をする。 ・家からは、授業参観や運動会などの学校行事に来る。
社会に対する興味・関心	・地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある。 ・新聞、テレビのニュース番組やインターネットのニュースから情報を得ている。
自尊感情	・物事を最後までやり遂げて、うれしかったことがある。
規範意識	・学校のきまり・規則を守っている。
学校における指導等	・総合的な学習の時間における探究活動を行う。 ・本やインターネットを使って、グループで調べる活動を行う。
授業	・自分の考えを発表する機会を確保した授業を行う。 ・学級の友達との間で話し合う活動を取り入れる。 ・発展的な学習の指導を行う。 ・小学校における補足的な学習の指導を行う。 ・国語の指導として、書く習慣を付ける授業、目的や相手に応じて話したり聞いたりする授業、様々な文章を読む授業を行う。 ・算数・数学の指導として、実生活における事象との関連を図った授業を行う。 ・調べたり文章を書いたりする宿題を与える。 ・適切にノートをとる、テストの間違いを振り返るなどの指導を行う。 ・学級全員で取り組んだり挑戦したりする課題やテーマを設定する。

家庭学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の予習、復習をする。</li> <li>・学校の宿題をする。</li> <li>・調べたり文章を書いたりする宿題を与える。</li> <li>・学校の授業時間以外での学習時間が長い。</li> <li>・自分で計画を立てて勉強する。</li> </ul>
学習規律	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私語をしない、話をしている人の方を向いて聞くなどを維持徹底する。</li> </ul>
言語活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各教科等の指導のねらいを明確にした上で、言語活動を適切に位置付ける。</li> <li>・様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導を行う。</li> <li>・発言や活動の時間を確保した授業を実施する。</li> <li>・学級やグループで話し合う活動を行う。</li> <li>・資料を使って発表ができるよう指導する。</li> <li>・自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導をする。</li> </ul>
研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員が、学校内外の研修や研究会に参加し、その成果を教育活動に積極的に反映する。</li> </ul>

表2 学力と関係のある要因について（参考：文部科学省 平成26年度 小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会 実施要項・関係資料）

### (3) 自尊感情や自己肯定感と学力との関係

表2にもあるように、全国学力・学習状況調査結果からは、自尊感情と学力との間に関係があることが分かった。自尊感情については、OECDのPISA調査2012によれば、我が国の児童・生徒の特徴として、学力は高い位置にあるものの全体的に自尊感情が低いという結果が示されている。PISA調査結果と同様に、「高校生の心と体の健康に関する調査報告書」（日本青少年研究所 平成23年3月）でも米国・中国・韓国と比較して、自尊感情が低い傾向があることが示されている。

平成20～24年度に行った東京都教職員研修センターの研究では、「A 自己評価・自己受容」、「B 関係の中での自己」、「C 自己主張・自己決定」の三観点に基づいて子供の自尊感情の傾向を把握することとし、例えば、学習意欲、進路に対する意識、友人関係を良好にすることが自尊感情を高めることにつながる要因の一部であることが確認された。

### (4) 学力低位層の把握

学力低位の児童・生徒については、下位層、低位層など様々な呼び方がされており、偏差値34以下としたり、評定5段階のうち2、1段階としたりしている自治体もある。全国学力・学習状況調査においては、正答率が40%以下の児童・生徒を下位層としている。

東京都教育委員会では、平均正答率マイナス5%に達しなかった児童・生徒を下位層と捉えており、教科ごとに下位層を示している。平成25年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」では、小学校算数が40.3%、中学校数学が40.4%と他教科に比べて下位層が多い。平成26年度児童・生徒の学力向上を図るための調査においては、教科書の例題レベルの問題である習得目標値を新たに設定しており、小学校算数では、習得目標値未達の児童の割合は15.4%であった。

平成26年度全国学力・学習状況調査において、主として「知識」に関する問題である〔国語A、算数・数学A〕における正答率が40%以下である下位層の割合を表3に示した。これを見ると、東京都では、約3割程度の児童・生徒が下位層に当てはまることが分かった。

	小学校国語A	小学校算数A	中学校国語A	中学校数学A
東京都	32.9%	31.5%	25.2%	33.7%
全国	38.1%	34.3%	28.2%	36.6%

表3 平成26年度全国学力・学習状況調査における下位層の割合

また、「都内公立中学校第3学年（平成25年12月31日現在）の評定状況の調査結果について」においては、評定1の割合は数学が最も高く、評定1と評定2の割合の合計は数学が20%を超えている（図1）。これらのことから、評定1と評定2が全体の30%以下となり、本研究の対象となり得ることが分かった。

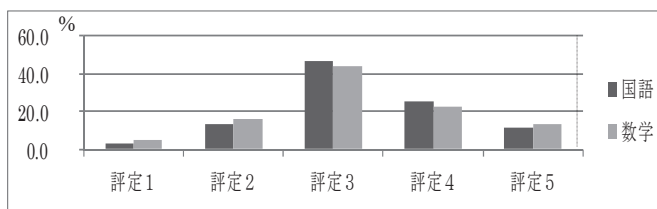


図1 都内公立中学校第3学年の評定状況

さらに、全国学力・学習状況調査結果及び児童・生徒の学力向上を図るための調査結果を過去3年間分、分析した。無解答率に着目して調べたところ、最も無解答率が高い中学校数学でも約15%であったことから、対象児童・生徒を下位2割の中から設定できることが分かった。

一方で、特別な支援を必要とする児童・生徒は、東京都では4.4%程度（「通常の学級に在籍する児童・生徒の学習障害(LD)、注意欠陥/多動性障害(ADHD)、高機能自閉症等に対応した教育的支援に関する研究」(東京都教職員研修センター 平成16年3月))、国では6.5%程度（「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」(文部科学省 平成24年12月))、通常の学級に存在していることが分かっている。

そこで本研究では、学力向上パートナーシップ事業等で学力向上の取組を推進しても下位2割にとどまっている児童・生徒を抽出し、さらに、学力面ではつまづいている児童・生徒に焦点化するために、「通級指導での指導の開始終了判定システムの構築に関する調査研究事業報告書」にある「学習と行動のチェックリスト」(表4)を用いた。そこから、対象児童・生徒に関わる担任等(教科担任等)複数名で話し合い、各観点にある内容の達成度を4段階の目安①20%以下②50~20%③80~50%④80%以上で評価した。そして、学習面で①や②が多く、行動面で①や②が少ない児童・生徒を本研究における学力低位層の対象児童・生徒とした(図2)。

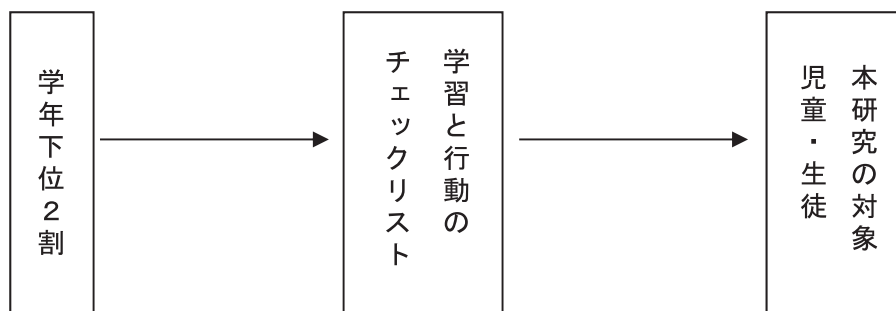


図2 対象児童・生徒の把握



学習面		行動面	
読む	1 2学年下の漢字が読める。 2 短文の理解や記述してある事実の理解ができる。 3 文章の読み飛ばしや読み間違いがなく音読ができる。 4 アルファベットが読める。 5 英単語（中1程度）が読める。	粗大運動	1 縄跳びやキャッチボールができる。 2 マット運動ができる。 3 全力疾走ができる。 4 鉄棒で懸垂（女子は斜懸垂）ができる。 5 馬跳びをすることができる。
書く	1 正しい字形で平仮名を書くことができる。 2 板書事項を正確に、かつ時間内に書き写すことができる。 3 2学年下程度の漢字が書ける。 4 作文を漢字混じりで書くことができる。 5 自分の考えを文章にまとめられる。 6 話を聞きながらメモを取ることができる。 7 アルファベットや英単語（中学校第1学年程度）を開いて正しく書ける。	微細運動	1 端に気を付けながら折り紙を折ることができる。 2 はさみで曲線等を正確に切り抜くことができる。 3 針に糸を通すことができる。 4 箸で物をつまむことができる。 5 蝶結びがスムーズにできる。 6 楽器の操作ができる。
聞く	1 個別に出された口頭の指示を聞いて行動できる。 2 一斉の指示を聞いて行動することができる。 3 学級や班での話し合いを聞いて理解できる。	注意	1 作品を最後まで仕上げることができる。 2 机の中や衣服の整理整頓ができる。 3 細かな点に注意して行動ができる。 4 持ち物を紛失したりせずに管理ができる。 5 他のことに気をとられずに一つのことだけに集中できる。 6 人の話に注意を向けて最後まで聞くことができる。 7 毎日の決まった仕事を忘れずにできる。
話す	1 自分の意思を適切に伝えることができる。 2 経験したことを順序よく簡潔に話すことができる。 3 スムーズに話すことができる。	多動	1 授業中、席に座っていることができる。 2 周囲の様子を見ながら落ち着いて行動することができる。 3 一定時間（10秒程度）身体を静止することができる。 4 授業中、教室から出ていかにいることができる。 5 手いたずら等をしないで過ごすことができる。 6 私語をせずに人の話を聞くことができる。
計算	1 暗算で加減を行うことができる。 2 小数の加減ができる。 3 整数2けた程度の四則計算ができる。 4 定規やグラフの目盛りの読み取りができる。	衝動性	1 順番を待つことができる。 2 ルールを守って行動することができる。 3 自己主張を我慢して周りに合わせるすることができる。 4 話の途中で割り込んだりせず、最後まで人の話を聞いたりできる。 5 不満な場面で感情を抑えて行動することができる。
推論	1 文章題の意味を理解して式を立てることができる。 2 $A=B$ 、 $B=C$ ならば $A=C$ であることが理解できる。 3 物事の因果関係を予測した行動がとれる。 4 簡単な地図が理解できる。	感情のコントロール	1 予定変更に合わせて順応した行動ができる。 2 新しい場所でも落ち着いて行動ができる。 3 パニックを起こさず感情を抑えることができる。 4 何かに固執しないで行動することができる。 5 状況や相手の気持ちを理解することができる。
		社会性	1 きまりを守った行動ができる。 2 皆と一緒に行動（集団行動）がとれる。 3 友達と協力したグループ行動がとれる。 4 友達と一緒に遊ぶことができる。 5 場の状況にふさわしい挨拶や返事ができる。 6 場所をわきまえた行動がとれる。 7 相手に合わせた適切な言葉遣いができる。 8 友達と会話を楽しむことができる。 9 人に対して親しみをもった言動ができる。 10 置かれている状況や立場の判断ができる。 11 最後までやり遂げることができる。

表4 学習と行動のチェックリスト（中学生用）

## 2 事例研究

### (1) 事例研究に当たって

ア 目的 学力低位の児童・生徒のつまずきの要因を明らかにする。

イ 対象

#### (7) 対象校

学力向上パートナーシップ事業における調査研究校のうち、都内公立小学校2校、中学校2校、計4校を本研究の研究協力校とした。

#### (イ) 対象児童・生徒

学力低位の児童28名、生徒24名、計52名

(小学校・国語) 第5学年9名、第6学年7名 (中学校・国語) 第2学年7名、第3学年6名  
(小学校・算数) 第5学年6名、第6学年6名 (中学校・数学) 第2学年6名、第3学年5名

## ウ 方法

### (7) 自尊感情測定尺度【東京都版】を用いた対象児童・生徒の自尊感情の調査

本研究では、対象児童・生徒が所属する学年の児童・生徒全員に自尊感情測定尺度【東京都版】を用いた質問紙調査を実施した。そして、対象児童・生徒一人一人の自尊感情測定結果とその児童・生徒が所属する学年集団の自尊感情測定結果とを比較することで、学力低位の児童・生徒の自尊感情の傾向を分析し、改善のための手だてを考察した。

#### (イ) 対象児童・生徒の活動状況の把握

対象児童・生徒1名に対して、観察者2～3名で児童・生徒の授業中の活動状況を記録した。また、授業後には、学習面、行動面、その他の面で観点を設け、振り返りシートにまとめた。

#### (ウ) 教員への対象児童・生徒についての聞き取り

対象児童・生徒の日常生活や他の学習の様子などについて、学級担任及び教科担任に聞き取りを行った。

#### (エ) 学力向上に関する組織的な取組についての管理職への聞き取り

学力向上における組織的な取組について管理職から聞き取りを行った。

### (2) 自尊感情測定尺度【東京都版】を用いた調査結果から明らかになったこと

本研究の対象児童・生徒52名（うち1名欠席）と対象児童・生徒の所属する学年集団の自尊感情について、自尊感情測定尺度【東京都版】を用いた自己評価を行った。

第一に、「A 自己評価・自己受容」、「B 関係の中での自己」の観点において、中学校の方が小学校よりも低い数値を示した。

第二に、対象児童・生徒をタイプ別に見ると、以下のように分類できた。（表5）。

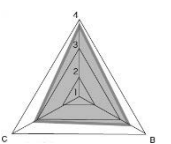
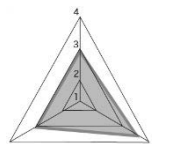
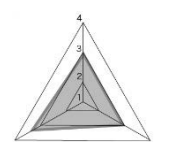
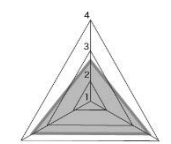
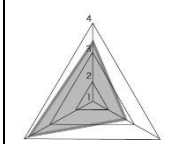
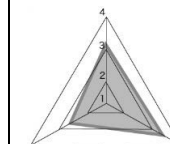
Iタイプ	IIタイプ	IIIタイプ	IVタイプ	Vタイプ	VIタイプ	なし
						
自己評価・自己受容が高いタイプ	関係の中での自己が高いタイプ	自己主張・自己決定が高いタイプ	自己評価・自己受容が低いタイプ	関係の中での自己が低いタイプ	自己主張・自己決定が低いタイプ	あてはまらない
0名	12名 (小6名、中6名)	6名 (小3名、中3名)	10名 (小5名、中5名)	3名 (小1名、中2名)	3名 (小2名、中1名)	17名 (小11名、中6名)

表5 対象児童・生徒のタイプの傾向

小学校から中学校へと発達段階が進むに従って、自尊感情は低くなっていく傾向があると言える。また、平均値としての差は見られなかったが、個別に見ていくと平均値よりも低い児童・生徒が存在していることから、いずれかの観点到だけに重視するのではなく、総合的な観点から個別の特性を的確に分析していくことが必要だと言える。

これらの結果を踏まえ、本研究では児童・生徒一人一人の特性に着目し、状況把握に重点を置いた児童・生徒理解の観点から、学習に対する取組について、個別の事例研究とし

て活動状況把握や聞き取り結果を交えた分析を行った。

(3) 対象児童・生徒の個別事例について

自尊感情の測定結果から、学力低位の児童・生徒は、学習に対する失敗の積み重ねの影響が学習意欲の低下につながっていると推測し、児童・生徒の活動状況把握に重点を置いた指導の手順を整理した。学習課題に対して、「個に応じた手だて」をどう講じるかによって児童・生徒の学習の成功の積み重ねが変わってくると考え、学習課題への取組を示すフローチャートを作成した（図3）。

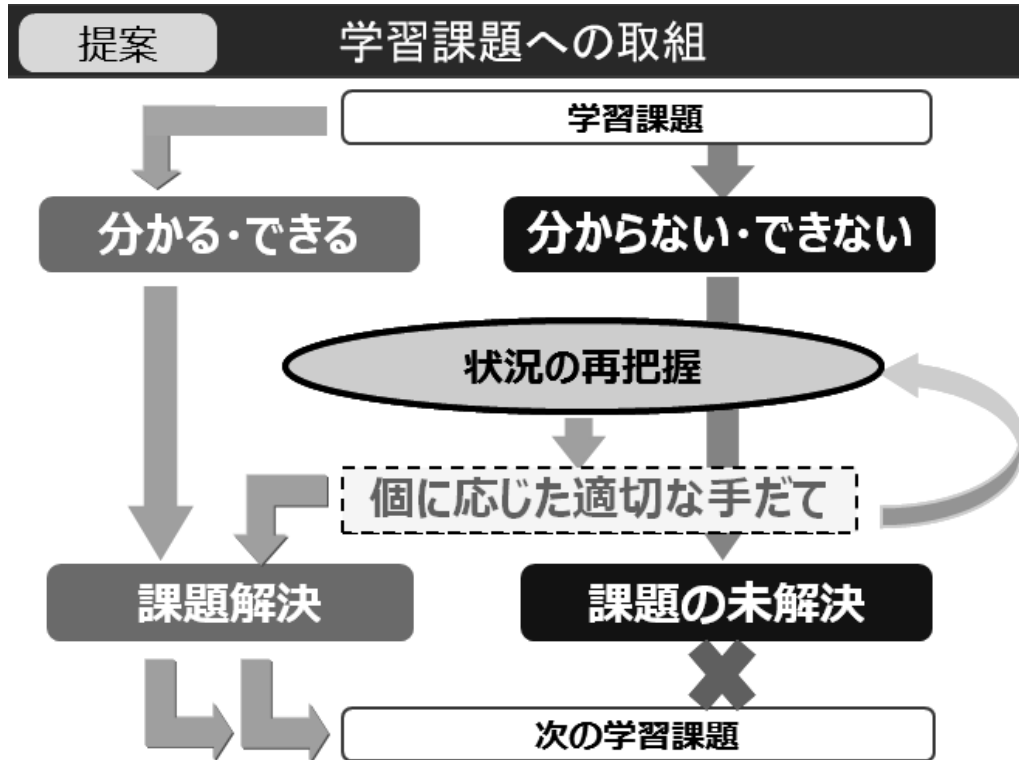


図3 学習課題への取組

本研究では、対象児童・生徒の授業における活動状況把握を複数で行い、授業後に観察者同士で、「学習と行動のチェックリスト」の項目を参考に情報の共有を図り、行動からつまずきの要因を探った。それに加え、教員（学級担任、教科担任等）への聞き取りで学習面だけではなく、生活面など様々な面からの情報を収集した。さらに、自尊感情測定尺度を用いた対象児童・生徒の自尊感情の情報も加味し、対象児童・生徒の状況を記した。それらの総合的な情報を基に、児童・生徒のつまずきに対して様々な要因を仮定し、本人の特性の中でも長所に着目することで、個に応じた改善の手だてを考察した。

学校では、個に応じて様々な手だてを講じているが、対象児童・生徒のように学力低位にとどまってしまう場合がある。様々な手だてを講じても効果が見られないときには、個に応じた手だてを見直すことに加え、手だてを講じる前段階の「状況把握」が間違っていないかどうかを見直す必要があると考えた。

そして、手だてがうまくいかないときには、もう一度、状況の再把握を丁寧に行い、個に応じた適切な手だてを講じることにより課題解決へと進むことができ、その後、知識・技能を身に付けた児童・生徒は自力で次の学習課題へと進むことができると考えた。

事例① 対象児童 A 小学校 第5学年 教科：国語 実施時期：平成26年11月

1 児童の状況

(1) 教員への聞き取り等から

① 興味・関心について

工作が好きで、図画工作の時間は意欲的に取り組んでいる。また、外遊びが好きである。

② 学習面での様子

国語と算数の定着に課題がある。算数は、少人数指導の教員から個別に指導を受けている。国語は、漢字の学習に苦手意識がある。文中の漢字を正す問題については難しさを感じていることから、新出漢字のみを出題する配慮をしている。

③ 生活面での様子

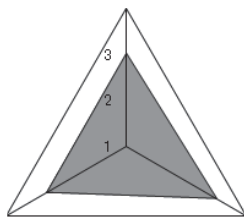
体力は平均的で、健康面は特に問題ない。提出物を期限までに提出することが難しく、家庭で学習する習慣が身に付いていない。

④ 人間関係

明るい性格で、休み時間は友達と外遊びやおしゃべりを楽しんでいる。また、放課後は、友達とゲーム等で遊んでいる。過去には、友達との関わりにおいてトラブルがあったが、特に避けられてはいない。

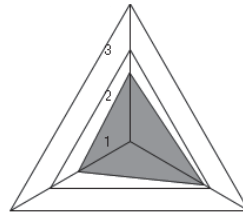
(2) 自尊感情測定結果

A 自己評価・自己受容



	平均
A	3.02
B	3.25
C	2.99

A 自己主張・自己決定



	平均
A	2.50
B	2.86
C	2.29

C 関係の中での自己

B 関係の中での自己

自尊感情測定結果 学年集団

自尊感情測定結果 個人

学年集団の自尊感情の測定結果と比較すると、個人の自尊感情の測定結果のレーダーチャートの方が小さいことから、全体的に自尊感情が低い傾向が見られる。個人のレーダーチャートの中で、A、B、Cを比較すると、「B 関係の中での自己」に比べて、「C 自己主張・自己決定」が下回っている。以上のことから、「B 関係の中での自己」の観点の高さを生かして、学習についても対人的な関わりを生かすことが有効であると考えられる。

(3) 担任による「学習と行動のチェックリスト」評価から

行動面については、全ての領域で80%の達成度である。

学習面については、「読む」、「聞く」、「話す」の領域が80%、「計算する」、「推論する」の領域が80～50%の達成度であり、「言葉だけの説明でその内容を表す簡単な図や絵が書ける」の項目が20%以下の達成度であった。

以上のことから、聴覚的な情報の処理を行うより、視覚的な情報や操作的活動を取り入れる方が効果的だと考えられる。

(4) 状況把握

平成26年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」では、22問中、正答数は12問であった。領域別の正答率は、「話す・聞く能力」が75%、「書く能力」が0%、「読む能力」が約66%であった。また、「読み解く力」に関する設問の正答率は、約34%であった。

「言語についての知識・理解・技能」の正答率が25%であったことから、漢字の書き取りや、言葉の役割、文の簡単な組み立てなどについて、既習事項の復習の必要があると考えられる。

上記調査の結果からは、細部に注目することが苦手だと考えられる。特に、漢字の誤答については、漢字の全体は捉えているが、細部を間違えているのか、全く書けないのか、同音異義語で間違えているのかなど、誤答を詳しく分析していく必要がある。

2 授業記録 小学校国語科（第5学年）単元名「天気を予想する」

	活動内容	教師の発問・指示	当該児童の様子
授業前	机上に教科書、ノート等の学習用具を出している。		
6分	範読を聞く。	・ 教員による音読	・ 教科書は机に立てて、文字を追っている。
10分	めあてを確認する。	・ この文章の種類は何ですか。（＝説明文）	
18分	音読する。	・ 音読しましょう。	・ <u>机、ノートに顔を近付けて書く。</u> ・ 教師の指示への反応は早い。
25分	初発の感想を書く。	・ <u>読み終わった人から、感想を書きましょう。</u> ・ 感想を書くのは、あと2分です。	・ <u>ノートに1ページ半分ぐらいの分量を書いた。</u>
30分	感想を聞き合う。	・ 近くの人と、感想を交換しましょう。	・ 近くの児童数人と小声で話す。後半は聞き役に回っていた。笑顔が時折見られる。
40分	感想を発表する。	・ <u>感想を発表しましょう。</u>	・ <u>発表者の方を向いて、よく聞いている。</u>
45分	まとめる。	・ <u>グラフを使っていることに気付いた人はいますか。</u> ・ <u>まとめを書きましょう。</u>	・ <u>他の児童の意見をメモする様子は見られない。</u> ・ <u>板書をノートに写していない。</u>

※下線部が活動状況の把握で着目した教師の発問・指示と児童の様子

3 個に応じた指導の工夫例

**交流の観点の明確化**

自分の考えを深めるためには、目的をもって相手の話を聞くことが大切である。どの部分に気を付けて聞けばよいのか、学習のねらいに合わせて交流の視点を示す。そして、大事な言葉に傍線を引いたり、メモをしたりするよう具体的な指示をすることや、他の児童の意見を聞く時間を設定することが集中して相手の話を聞き、自分の考えを深めることにつながると考える。

**スケジュールの提示と具体的な指示**

教員からの指示にはすぐに行動し、意欲的に取り組むことができている。しかし、自分で考える課題に対しては、自ら主体的に取り組むことができず苦手意識がある。よって、本人の意欲を受け止め、一単位時間の学習の流れを提示するとともに、何をやる場面であるのかといった「指示」や「説明」を明確にすることで、取り組む内容を理解し、学習に対しても理解が深まると考える。また、板書のどの部分をノートに写すのかを指示したり、色や印を付ける等で注目すべき所を明確にしたりすることや、電子黒板のデジタルコンテンツ等を活用する工夫をしたりできるとよい。

**思考の整理とペア学習**

自尊感情の測定結果にあるように、本人にとっては他者との関わりを重視している傾向が見られる。話合いの場面では笑顔も見られ、より意欲をもって取り組んでいる様子が見られた。課題を焦点化するとともに、ワークシートなどを活用し、「何をどう書けばよいか」という具体的な手だてを講じるとともにペア学習で話し合いながら学習を進めることで、集中して課題に取り組み、考えが整理され、より理解が深まったり、表現力が高まったりすると考えられる。



事例② 対象児童 B 小学校 第5学年 教科：算数 実施時期：平成26年11月

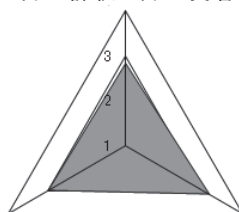
1 児童の状況

(1) 教員への聞き取り等から

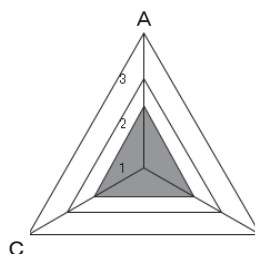
- ① 興味・関心について  
得意な教科は特にはない。しかし、国語の音読は上手なため周囲に認められており、本人も音読には意欲的に取り組もうとする。
- ② 学習面での様子  
漢字の書き取りが苦手なため、第1学年の漢字から復習を行っているが、第1学年の漢字の正答率は8割程度である。
- ③ 生活面での様子  
生活習慣の乱れがあり、遅刻や欠席について家庭から連絡がないことがある。また、宿題や提出物は、提出がないことがある。
- ④ 人間関係  
中学年の学年当初に転入してきたが、他の児童との人間関係は良好に築けている。嫌なことについては、自分の意思をはっきりと伝えることができる。

(2) 自尊感情測定結果

A 自己評価・自己受容



	平均
A	2.83
B	3.14
C	2.98



	平均
A	2.38
B	2.29
C	2.29

C 自己主張・自己決定    B 関係の中での自己

自尊感情測定結果 学年集団

自尊感情測定結果 個人

学年集団の自尊感情の測定結果と比較すると、個人の自尊感情の測定結果のレーダーチャートの方が小さいことから、全体的に自尊感情が低い傾向が見られる。個人のレーダーチャートの中で、A、B、Cの三観点を比較しても、全般的に低い傾向がある。以上のことから、全般的に自尊感情を高められるような手だてを考える必要がある。

(3) 担任による「学習と行動のチェックリスト」評価から

- 行動面については、全領域が80%以上の達成度であった。
- 学習面については、「読む」、「聞く」、「話す」の領域が80%以上の達成度だが、「書く」、「計算」、「推論する」の領域は、50%以下の達成度であった。
- 以上のことから、聴覚的な処理の力が強く、端的な言語指示が有効であると考えられる。

(4) 状況把握

教科別に見てみると、他の教科と比べて算数の定着に課題がある。  
観点別においては、「算数への関心・意欲・態度」、「数学的な考え方」、「数量や図形についての技能」が目標到達度まで至っていない。特に、「数学的な考え方」については、低・中学年段階から積み重ねが見られない状況である。  
自尊感情についても全般的に低い傾向が見られることや、第1学年時から既習内容のつまづきがあることから、これまでの学習経験において、失敗の積み重ねが自信のなさにつながっていることが考えられる。  
また、自己主張に積極的でない様子が見られることから、課題に対して困ったときに質問したり、助けを求めたりすることができているかを注意して観察し、必要に応じて声を掛けていくことが考えられる。  
さらに、国語の音読のような得意なことに対しては高い学習意欲が見られるので、失敗に対する不安を軽減させる手だてが必要である。

2 授業記録 小学校算数科（第5学年）単元名「図形の角を調べよう」

	活動内容	教師の発問・指示	当該児童の様子
授業前	自分の座席に座り、姿勢を正して、授業が始まるのを静かに待っている。		
0分	課題把握	(サッカーボールを提示し) どのような図形が見えますか。	・サッカーボールを見て、「五角形と六角形がある」とつぶやいている。
7分	既習事項の確認	三角形の内角の和は、何度でしたか。	・他の児童の発言などはよく聞いている。
10分	自力解決	五角形の内角の和を調べます。	・ <u>図形に対角線を書き、考えようとしている。</u> ・ <u>考えを何度も書いたり、消したりしている。</u> ・髪の手や顔などを触っている。
20分	話合い	どのように調べたのか、発表しましょう。	・他の児童の発表をしっかりと聞いている。 ・他の児童の説明を聞き、 <u>ノートに書いた自分の考えを消している。</u> ・自分の考えを取り上げられた際には、とてもうれしそうな反応をしている。
43分	まとめ	六角形でもできるという人もいますが、どうですか。	

※下線部が活動状況の把握で着目した教師の発問・指示と児童の様子

3 個に応じた指導の工夫例

具体物を活用した教材の提示

授業の始めにサッカーボールを提示し、サッカーボールにある図形を見いだす活動で授業に入ったことから、児童Bの興味・関心を引き出すことができた。また、五角形の内角の和を考える際には、あらかじめ五角形が描いてあるワークシートを用意し、児童に配布していた。このことで、図形の抽象的なイメージを具体化し、学習課題が理解でき、つまづくことなく課題に取り組むことができていた。

以上のことから、児童Bにとって、具体物を活用した教材提示は有効であり、教室環境によってはICTを効果的に活用すれば、同様の学習効果を期待することができる。

考えの価値付けと継続的な声掛け

授業を通して児童Bは、自分で書いたものをすぐに消すという行動を繰り返していた。このことから、自分の考えに自信がもてないことがうかがえる。自力解決の場面で机間指導をする際、児童Bのノートを見て直接言葉を掛け、考えを価値付けるようにする。また、間違えることに対する不安感があることが考えられるので、授業の中で孤立しないよう配慮し、こまめに声を掛け、できたことを確認していくなど学習の成功体験を積み重ねていけるとよい。

そして、学習の取組への評価としては、授業の中で個別に評価する時間が取れなかった際には、授業後にノートを集め、ノートからその児童の考えを確認し、細かく評価する。

ペアやグループでの話合い活動

話合いの場面において、他の児童が説明しているときには説明している人の方に体を向けて、集中して聞くことができていた。教師が一方的に説明するのではなく、ペアやグループを活用し、確認し合える学習場面を設定していけるとよい。

事例③ 対象生徒C 中学校 第2学年 教科：国語 実施時期：平成26年11月

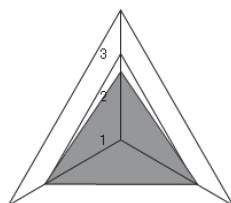
1 生徒の状況

(1) 教員への聞き取り等から

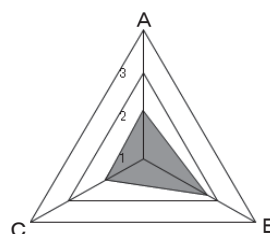
- ① 興味・関心について  
運動部に所属し、当番や掃除等の活動に意欲的に取り組んでいる。
- ② 学習面での様子  
5教科とも学力が伸び悩んでいる傾向がある。また、既習内容を十分に理解していないところがあり、漢字の小テストでは、直前まで練習していても、正答率は4割程度である。
- ③ 生活面での様子  
明るい性格で、日常生活に問題はないように見える。粘り強いところがあり、失敗にくじけず、学習課題へ取り組むことができる。提出物に関しても問題はない。
- ④ 人間関係  
休み時間は元気に過ごすことができ、他の生徒との関係も良好である。兄弟とも関係がよく、保護者も協力的である。

(2) 自尊感情測定結果

A 自己評価・自己受容



	平均
A	2.58
B	3.05
C	3.03



	平均
A	2.13
B	2.71
C	2.00

C 自己主張・自己決定

B 関係の中での自己

自尊感情測定結果 学年集団

自尊感情測定結果 個人

学年集団の自尊感情の測定結果と比較すると、個人の自尊感情の測定結果のレーダーチャートの方が小さいことから、全体的に自尊感情が低い傾向が見られる。また、個人の中で、A、B、Cの三観点で比較すると、「A 自己評価・自己受容」と「C 自己主張・自己決定」は、「B 関係の中での自己」に比べて低い。他者との関係性を高める活動を行うことで、自分に自信をもつなど、自己へ向かう気持ちについての評価を高めていく工夫が考えられる。

(3) 担任による「学習と行動のチェックリスト」評価から

行動面については、全ての項目で80%以上の達成度であった。

学習面については、「話す」、「計算する」領域では80%以上、「読む」、「聞く」、「書く」「推論する」領域での項目において80%以上、80~50%の達成度であった。

(4) 状況把握

平成26年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の国語科の総合結果は、正答率が42.9%であった。

「A 教科の内容」の調査結果では、正答率が45.8%であった。観点別の調査結果では、「話す・聞く」と「言語」について40%を下回る結果であった。一方で、「読む」、「書く」については、50%を上回っている。

「B 読み解く力に関する内容」では、正答率が25%であった。観点別の調査結果では、「取り出す力」と「解決する力」には正答がないことから、「必要な情報を正確に取り出す力」や「意図や背景、理由を理解・解釈・推論して解決する力」に課題があると言える。

以上のことから、既習内容の定着の課題とともに、新たな課題については応用的な学習で理解が弱くなっていることが考えられ、これまでの既習内容の確認が必要だと考える。

自尊感情測定結果からは、日常生活において対人関係がよく、相手との関係性の中では自分を受け止めてもらっているという安心感があることがうかがえる。一方で、自分自身の能力については様々な失敗経験から挫折感を感じている傾向が見られるので、周囲と関わり、安心感をもたせ既習内容の振り返りをしながら、基礎的な学力の定着を図ってほしい。

2 授業記録 中学校国語科（第2学年）単元名「平家物語」

	活動内容	教師の発問・指示等	当該生徒の様子
授業前	机上に教科書やノートなどの準備をしていた。		
0分	音読	一文ずつ交代で読みます。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書に顔を近付けて、文章を追っている。</li> <li>・一文をつかえずに音読している。</li> </ul>
10分	文章の内容理解	古典用語の説明を行っている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・姿勢がくずれてきて、机に顔を近付けてワークシートに板書を写す。</li> <li>・教師の発問や説明に反応せず、ワークシートの記入や色付けを続ける。</li> <li>・単語に色ペンで印を付ける。</li> </ul>
30分	ワークシートに自分の考えを記入	ワークシートに自分の考えを書きましょう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・周囲の反応や様子を気にしている。</li> <li>・教師の指示通りに取り組んでいない。</li> <li>・教科書の文章をペンで何度もなぞる。</li> <li>・教師の言葉掛けを受け、ワークシートに書く、消すを繰り返している。</li> </ul>
50分			<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達に話し掛け、答えを確認している。</li> </ul>

※下線部が活動状況の把握で着目した教師の発問・指示と生徒の様子

3 個に応じた指導の工夫例

明確な指示とスケジュールの提示

対象生徒は、一つの指示に対しては理解し行動することができるが、複数の発問・指示や説明が重なると理解が難しい。そこで、教員が発問・指示や説明の文節を区切って短くすることや、活動と指示を区切って行うことで、周囲のペースに付いていけるように配慮ができるとよい。

学習中のつまずきに対する配慮として、学習場面ではスケジュールを提示し、「今は、何をする場面か」について具体的な指示をしていくとよい。

板書についても、重要事項や注目すべき内容を焦点化し、色や印を付ける等で具体的に示していくことが効果的である。

ペアでの活動

誤答に対する不安から、隣の生徒に答えを確認する行動が多く見られた。他の生徒に「そうだよ」と肯定されたときには、自信をもって取り組む様子が見られた。このことから、ペアでの活動や対話などを取り入れることで、自信をもたせることができると考えられる。

継続的な声掛けと選択肢の提示

失敗に対する不安感が見られるため、学習の進め方について周囲の生徒と一緒に確認するだけでなく、分からないことを伝える方法をあらかじめ決めたり、教師がこまめに声を掛け、できたことを確認したりしていくなど、つまずきを早期に発見し、場面に応じて個別に対応できるようにする。また、発問については、「自分で考えをまとめる」ことは苦手なので、選択肢を示し、それを選んだ根拠をまとめることで、自分の論拠や考えを整理できるように支援する。

事例④ 対象生徒D 中学校 第3学年 教科：数学 実施時期：平成26年11月

1 生徒の状況

(1) 教員への聞き取り等から

① 興味・関心について

第2学年時よりも数学の学習に対して前向きになり、内容を理解もしているが、基礎コース（2学級3展開のうち、習熟に重点を置いたコース）の方が適している。

② 学習面での様子

第1学年の頃より、学習しなければならないという考えをもつようになったが、授業中は、近くの他の生徒の方を向き、他の生徒と話すことが多い。

③ 生活面での様子

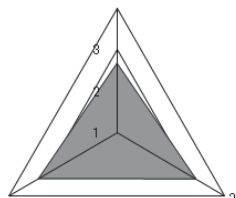
提出物は、提出期限を守ることが少ない。家庭への手紙を見せないため、家庭からの提出物は出ることがない。

④ 人間関係

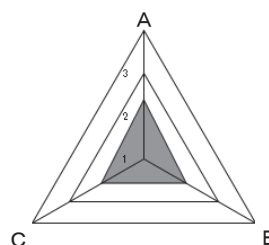
第1学年時に周囲からからかわれたことがある。第2学年頃からは、このようなことはなくなった。

(2) 自尊感情測定結果

A 自己評価・自己受容



	平均
A	2.68
B	3.20
C	3.19



	平均
A	2.38
B	2.14
C	2.14

C 自己主張・自己決定 B 関係の中での自己

自尊感情測定結果 学年集団

自尊感情測定結果 個人

学年集団の自尊感情測定結果と比較すると、個人の自尊感情測定結果のレーダーチャートの方が小さいことから、全体的に自尊感情が低い傾向が見られる。個人の中で、A、B、Cの3観点で比較すると、「A 自己評価・自己受容」の観点より、「B 関係の中での自己」、「C 自己主張・自己決定」の観点が低い傾向がある。

以上のことから、結果に対する不安や対人的な関係には、特に配慮を要する必要があると考えられる。

(3) 担任による「学習と行動のチェックリスト」評価から

行動面については、全ての領域で80～50%の達成度であった。

学習面については、「計算する」領域では、達成度が80%以上で、「読む」、「聞く」、「話す」領域は80～50%の達成度であった。

(4) 状況把握

「平成26年度全国学力・学習状況調査」では、数学Aは、36問中、正答数14問であり、正答率は38.8%、数学Bは、15問中、正答数3問であり、正答率は20%であった。

数学Aでは、図形領域・関数領域、資料の活用領域において誤答が多い。数学Bでは、数と式領域、図形領域、関数領域、資料の活用領域の全領域において誤答がある。

以上のことから、必要な情報を統合することにつまずき、その結果が、応用問題の誤答につながっているものだと考えられる。

また、授業中に私語が多く、周囲の生徒に活動内容を確認する行動が多く見られる。また、自尊感情が相対的に低い傾向が挙げられ、失敗に対する不安感の払拭や、学習意欲の低下に配慮を要する。



2 授業記録 中学校数学（第3学年）単元名「三平方の定理」			
	活動内容	○教師の発問・指示	当該生徒の様子
授業前	周囲の友達と話している。		
0分	前時の復習	前時の学習を想起させる。	・後ろの生徒が気になり、後ろ向きのまま私語を続け、授業に集中していない様子がある。 <u>教科書は忘れてきた。</u>
10分	教科書の問題を説明	板書をしながら説明する。	・椅子の背もたれに寄り掛かりながら、私語を続ける。机の上に置いてある図形に触り、考えようとしている。
15分	友達の発表  問題を解く	解法を確認する。	・筆記用具を持たずに聞いている。 <u>問題に取り組もうとしない。</u> ・ワークシートに何かを書いている様子だが、友達が教えた答えを聞いている。 ・教員から指名されるが、「嫌です。」と返答する。
20分	友達の発表	意図的に指名する。	・他の児童と私語を続け体を横に向けたまま授業に集中しない。 ・板書を写す様子がある。 ・教員の指示に応じず、後ろの友達と私語を続けている。
30分	定義の確認 問題演習	板書により解説する。	・教員の説明を聞くことなく、私語を続ける。 ・友達の筆記用具を手を持って遊んでいる。 ・ワークシートに書いている。
35分	定義の書き取り	板書により解説する。	
45分		黒板の前に出て解く。	・問題を解く。正答である。 ・座席を離れ、忘れ物を取りに行く。
50分		ワークシートに書くよう指示する。	・他の児童と私語を続け、区切りのよいところで座席に戻る。

※下線部が行動観察で着目した教師の発問・指示と児童・生徒の様子

### 3 個に応じた指導の工夫例

#### 学習の見通しをもたせる

学力低位にある生徒は、周囲の雰囲気につきずられてしまうことがある。学習規律を整え、落ち着いた環境をつくる必要がある。そのためには、発言のルールを明確にする、本時に終える課題を示すなど、達成できる目標を設定し、生徒へ評価を返すといった取組を継続的に行うことで、学習に対する動機付けをしていく。

#### 既習内容の確認とウォーミングアップによる動機付け

学習意欲が低い傾向にある生徒には、学力の習熟の程度に応じた課題に取り組ませ、基礎的・基本的な知識・技能の定着と成功体験から意欲の向上を図ることが必要である。そのためには、ウォーミングアップとして、授業の導入時に既習内容の確認や本時で使用する基礎計算を解くなどして、学習に対する気持ちを整えるとともに、授業の途中で既習内容の確認をしなくても済むような学習環境の整備が有効である。

#### 選択肢のある発問とペア学習

対象生徒にも意図的な指名により発言の機会を設ける。その際、「どう思いますか。」という抽象的な発問よりも、「この考え方のどれだと思いますか。」などの選択肢を提示し、それを選んだ理由や根拠を発表させるようにする。また、他の生徒の解法や考え方を復唱させ、理解の状況を確認していく。そして、小集団で問題を解き、話し合いの中で自己の立場を明確にし、授業参加を促していく。

#### (4) 聞き取り調査の結果について

##### ア 教員への対象児童・生徒についての聞き取り

対象児童・生徒に関する情報は、様々な背景から多種多様であることが分かった。性格面では、おとなしい、活発、人懐こいなど様々である。また、運動面では、得意な児童・生徒もいれば、そうでない児童・生徒もいた。そして、家庭環境についても同様に個々の児童・生徒によって様々であった。

今回、聞き取りを行った教員は、授業中における対象児童・生徒への個別の言葉掛けや宿題の出し方、できたときの称讃等の工夫をしていた。

また、指導を学校だけで完結するのではなく、対象児童・生徒の学力向上という同じ目標を家庭ともち、連携していた。そして、できるだけ早い段階で、できれば小学校低学年時に児童・生徒一人一人の状況把握を行い、適切な手だてを講じたいとの思いをもっていた。

##### イ 管理職への学力向上に関する組織的な取組についての聞き取り

- ・授業時間中には理解したように見えても、実際には時間が経過すると忘れてしまい定着が図られていないことがあった。そのために、東京ベーシック・ドリルなどのドリル型学習を行い、児童・生徒のつまずきに応じて弱点を克服するよう繰り返し取り組んでいた。
- ・学力向上に関して小中連携に力を入れていた。授業交換、年間3回の連絡協議会に加え研究分科会を設置し、協力して研究を進めたり、合同研修を行ったりしている。小学校では、夏季休業日中に中学校へ教員を派遣し、小学校段階の算数の内容を復習する授業を行ったり、中学校では、英語の教員を小学校へ派遣したりしている地区もあった。この取組を通して、小学校でのつまずきが中学校の学習にどのように影響するのかを、小学校教員が実際の授業場面を通して実感することができていた。
- ・補習学習については、放課後に曜日を決めて実施したり、土曜授業日の設定や長期休業期間中に実施したりするなど取組の時期や内容について工夫をしていた。また、実施に当たっては、希望制や指名制など補習内容や対象を焦点化していた。
- ・地区の実態にもよるが、近隣の大学と連携したり、ボランティアを募ったり、学習支援員を配置したりするなど地域の人材を積極的に活用していた。
- ・今回、聞き取りを行った学校は、どの学校も学力低位の児童・生徒の学力を少しでも向上させたいとの願いをもって授業改善に真摯に取り組んでいた。

このように学力向上に関して様々な取組を行っており、実際に効果を実感できるケースがある。今後は、成果について更に詳細に検証していく必要がある。

#### (5) 事例研究のまとめ

対象児童・生徒52名について、状況把握や教員等への児童・生徒についての聞き取り、学力調査結果等様々な情報を総合的に収集し、児童・生徒のつまずきの要因の分析を行った。その結果、対象児童・生徒に共通して、以下の様子が見られた（表6）。

学習につまずいているように見える様子	学習に向かっているように見える様子
<ul style="list-style-type: none"> <li>○一単位時間を通して</li> <li>・学習活動に関係なく、ものを触る。 (筆箱、鉛筆、消しゴム、洋服等)</li> <li>・体を頻繁に触る。(髪の毛、顔を触る、爪をかむ)</li> <li>・ペン回しをずっとしている。</li> <li>・そわそわしている。</li> <li>・頬づえを付く。</li> <li>・顔が机(ノート)に近い。</li> <li>・机にもたれ掛かる。</li> <li>○教師の指示の後</li> <li>・取り組み始めるまでに時間がかかる。</li> <li>・あくびや手遊びなどの頻度が多い。</li> <li>・ノートを手で隠す。</li> <li>・書いては消し、消しては書く。 →黒板に正解が書かれたらそれを写す。</li> <li>・きょろきょろと周りを気にする。</li> <li>・多くの指示を理解できない。</li> <li>・今やるべきことが理解できていない。</li> <li>○ノート等書いている最中に教師が次の指示をしたとき</li> <li>・ノートを写す活動をやめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○教師が個別に具体的指示、励ましなどの言葉掛けを行ったり、机間指導したりしたとき</li> <li>○友達との関わりが見られる学習形態(ペア、グループでの活動)のとき</li> <li>・うれしそうだった。学習活動を開始または再開した。</li> <li>○間違っても大丈夫という温かい学級の雰囲気があるとき</li> <li>・発言した。手を挙げた。</li> <li>○発問・指示が具体的で明確なとき、板書を写すとき</li> <li>○ワークシートにおいて、幾つかの選択肢から選んで回答するとき</li> <li>○教材の視覚化(音声だけによらない提示や説明)がされていたとき</li> <li>・やるべきことが分かり、活動していた。</li> <li>○色ペンを使ってノートを工夫するとき</li> <li>・活動時間が長かった。</li> </ul>

表6 教師の発問・指示に対して、比較的共通性が見られた児童・生徒の様子

上記の結果においては、学力低位の背景として、失敗体験の積み重ねによる自尊感情の低下が考えられることから、成功体験のサイクルをどう形成するかがポイントとなる。

対象児童・生徒の課題は、複合的に絡んでいる場合があるため、学力低位の背景は、表出している状態に対して背景にその要因が潜んでいると考えられる。そこで、本研究では、「集中が続かない」、「興味・関心がもてない」、「自分に自信がない」、「やるべきことが分からない」という四点の共通性に対して、仮説的ではあるが要因と指導方法を考察し(表7)、三つの視点から手だてを提案することとした。

課題 (表出している状態)	要因(要因仮説)	手だて(例)
興味・関心がもてない	・動機付けがされない。 (行動を強化する刺激がない。)	事例②具体物を活用した教材の提示 事例④既習内容の確認とウォーミングアップによる動機付け
自分に自信がない	・自尊感情が低下している。 (無力感、失敗恐怖)	事例②考えの価値付けと継続的な声掛け 事例③継続的な声掛けと選択肢の提示 ペアでの活動 事例④選択肢のある発問とペア学習
集中が続かない	・どこへ注意を向けてよいのか分からない。 ・授業以外の要因によって、注意が阻害されている。	事例①交流の観点の明確化 思考の整理とペア学習 事例②ペアやグループでの話し合い活動
やるべきことが分からない	・指示や説明を聞き逃してしまう。 ・指示な説明などの情報の提示が実態に合っていない。	事例①スケジュールの提示と具体的な指示 事例③明確な指示とスケジュールの提示 事例④学習の見通しをもたせる

表7 学力低位の児童・生徒の課題、要因、手だてについて

### 3 提案

基礎研究から、学力に影響を及ぼす要因は様々あり、学力向上に関する効果的な取組もいくつか報告されていることが分かった。そこで、事例研究を通して、52名の活動状況の把握を行い、対象児童・生徒に関する情報を様々な角度から収集し、一人一人の全体像を把握した上でつまずきの要因を探り、個に応じた指導の工夫を考えた。さらに、52名の事例を分析することで、対象児童・生徒に比較的共通する特徴を見いだすことができたことから、これらの共通した特徴に対する手だてを提案することとした。

また、管理職による聞き取りから、全校的な視野から取組を見直し、組織として対応していくことの重要性に気付くことができた。そこで、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させる指導の工夫として、各学校の実践を再確認しながら、「状況把握を生かした授業改善」、「組織的な取組」の二つの視点から以下のようにまとめた。

#### (1) 状況把握の方法

##### ア 児童・生徒一人一人を把握するための方法

これまでは、学級担任や教科担任一人一人の努力により、児童・生徒の状況把握が行われてきたと考えられるが、学力低位の児童・生徒の指導方法や支援の在り方を考えていくに当たっては、更に一步踏み込んだ詳細な分析が求められる。つまり、PDCAサイクルを形成するに当たって、事前のR (Research)が非常に重要となる。状況把握は、組織的に行うことが望ましい。なぜなら、個に応じた手だてを共有することは、関わる教員により異なる指導が行われることを避け、対象児童・生徒に同じ方向性をもって指導をすることができるからである。

本研究においては、複数の教員により、授業場面の活動状況の把握や学力調査結果の分析、学習と行動のチェックリストの活用、自尊感情測定尺度などを用いて様々な角度から学力低位の児童・生徒一人一人の状況を把握した。このことは、児童・生徒をめぐる環境（学習面、行動面、その他）をより詳細に把握するだけでなく、複数の教員で情報を共有することにより、縦断的及び横断的に組織的な対応を進めることができる。

##### イ 児童・生徒一人一人を把握するための校内研修例

授業における活動状況把握の視点の明確化、学力調査の分析方法、自尊感情測定尺度の活用など、客観的な観点に基づく状況把握について上述したが、それを授業に反映させる流れを校内で共有していくことが研修として有用である。その際、児童・生徒を把握するための方法を年度当初の校内研修で共通理解することで、組織として学力向上に取り組む一つの手だてとすることができる。

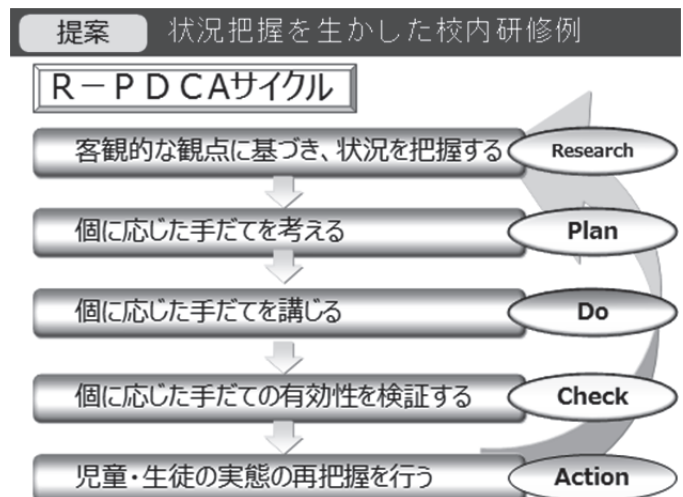


図4 R-PDCAサイクル



また、それらを踏まえて、対象児童・生徒の情報の共有化、R-PDCAサイクルを活用した授業改善も考えられる（図4）。

## (2) 状況把握を生かした授業改善

### ア 意欲を持続させるユニット学習や授業時程の工夫

共通して見られる特徴として集中が長く続かないということがあった。そのため、集中力や意欲を持続させ、興味・関心を高めるために、場面の転換を図る15分ユニット（単位）の学習を複数用意しておき、児童・生徒の実態に応じて取り入れる。また、モジュールの導入など、学校・地域・児童・生徒の実態に合わせて柔軟に時程を工夫する。

### イ 既習事項の確認やウォーミングアップ学習を取り入れた学習形態の工夫

授業開始後、数分を使って既習事項を想起させるようなウォーミングアップ学習を取り入れ、東京ベーシック・ドリルなどで既習内容を確認する機会を設定する。

また、学力低位の児童・生徒の多くは、自分の考えに自信がもてないため、全体の場で自分の考えを積極的に発表しようとしにくい傾向がある。そのような児童・生徒であっても、全体の場ではできない発言や質問をペアやグループによる協働的な学習活動の中で、他の児童・生徒に対して発言することができる可能性がある。その際、学習面、人間関係面を考慮して学習効果の期待できる意図的なペアやグループ構成を教師が設定することが条件となる。

### ウ 授業規律の徹底

「学習のきまり」などを学校独自に作成し、学級で掲示して意識付ける。また、進級後、教師が統一した学習規律を用いて同じ目標に向けた指導を児童・生徒に行うことで学習に向かう姿勢を身に付けさせる。

### エ 発問・指示・説明の明確化

発問・指示・説明を明確に区別し、端的に児童・生徒に提示することが重要である。また、児童・生徒が思考している時間に追加発問、追加指示及び追加説明を行わないよう気を付ける。

### オ 個別の言葉掛け

自信のなさが見られることを、正しい解答をしようと慎重に思考していると肯定的に捉え、個別の言葉掛けが有効ではないかと考えた。自力解決の場面で机間指導をする際、児童・生徒のノートを見て、考えを認める、励ますなど直接言葉を掛けたり、授業後にノートを集めてコメントを記入したりする。

## (3) 組織的な取組

本研究を通して、各学級に数名程度、学力低位の児童・生徒が必ず存在することが明らかとなり、対象となる児童・生徒に関わる担任や教科担任が日々一生懸命取り組んでいることも分かった。特に言えることは、学級担任や教科担任が、学級の問題を一人で抱え込むことがないようにしなければならないことである。本研究の調査研究から、指導方法や組織的な対応方法に関する悩みも挙げられており、これらを解決していくことが、児童・生徒の学力向上につながる支援になると考えた。そのための手だてを以下に示す。



## ア 人材の活用

校内の人材では、学習支援員を活用し、ティーム・ティーチング、個別指導などつまずきが見られる児童・生徒にきめ細かな指導を行う。さらに、地域の人材等の積極的な活用を図り、きめ細かな指導の充実を図る。

## イ 補習学習の実施

始業前の学習、給食前の時間、放課後など各学校の実態に合わせて補習授業の時間を設定する。

## ウ 家庭への働き掛け

「家庭学習の手引き」を作成し、全家庭に配布したり、学力向上に特化した保護者会を実施したりする。

## エ 小中連携の強化

小学校と中学校の教員が互いに授業観察を行ったり、合同校内研究会を行ったりする。中学校に進学した際には、つまずきのある児童が、小学校の教員が中学校に出向き、つまずきに対して立ち戻る指導を実施する。また、児童の状況やつまずきの背景等、様々な情報を中学校に引き継ぐ。

## 第5 研究の成果と今後の課題

### 1 研究の成果

本研究では、学力低位の児童・生徒の学習への関心や意欲を高め、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるための様々な情報を収集し、事例研究を通してその分析を進めてきた。

研究の成果として、以下の2点を挙げることとする。

- ・研究協力校における学力低位の児童・生徒を対象に、活動状況の把握及び教員への児童・生徒についての聞き取りから、学力低位の児童・生徒の状況を把握した。児童・生徒の状況を把握するために、様々な角度から情報を集め、総合的に状況を把握する状況把握の方法について提案した。
- ・「状況把握を生かした授業改善」、「組織的な取組」の二つの視点から個に応じた指導の工夫としての手だてを整理した。

### 2 今後の課題

本研究では、対象児童・生徒の学力低位の背景として、教員も含めた周囲の環境に関する影響が視点の一つであることが明らかになった。したがって、様々な資源を活用した支援体制を整えるとともに、学習環境に着目し、その手だてを講じることが重要である。

近年、各学校では在籍する全ての児童・生徒に分かりやすい環境を整備する取組が進み始めている。今回の事例研究のように、児童・生徒一人一人を大切にしたい取組を組織として丁寧に推進していくことは、全ての児童・生徒にとって有効な取組となる。つまり、児童・生徒のつまずきだけを捉えて特別な支援を講じようとするのではなく、多様な学びに対応できる学習環境を設定することを組織的な課題として捉え、学校全体で改善を図っていくことが有効である。

更に取組が進めば、対象児童・生徒の支援体制の構築も視野に入れる必要がある。校内

委員会等を組織し、対象児童・生徒に対する支援員や外部人材等を活用するなど、内部資源と外部資源との相互連携を図りながら対象児童・生徒への支援内容を検討していくことが有効であると考えます。

本年度は、研究の1年次に当たり、学力低位の児童・生徒の背景にある要因を仮説的に分析し、その手だてを考察した。今後の課題として、提案した手だてについて有効かどうか2年次で検証を行う必要がある。

## ○参考文献・資料等

- ・「小学校学習指導要領」 文部科学省 平成20年3月告示
- ・「中学校学習指導要領」 文部科学省 平成20年3月告示
- ・「小学校学習指導要領解説」（総則、国語、算数） 文部科学省 平成20年8月
- ・「中学校学習指導要領解説」（総則、国語、数学） 文部科学省 平成20年9月
- ・「教育の情報化に関する手引き」 文部科学省 平成22年10月
- ・「言語活動の充実に関する指導事例集～思考力・判断力・表現力等の育成に向けて」  
【小学校版】 文部科学省 平成22年12月
- ・「言語活動の充実に関する指導事例集～思考力・判断力・表現力等の育成に向けて」  
【中学校版】 文部科学省 平成23年5月
- ・「OECD生徒の学習到達度調査～2012年調査分析資料集～」 文部科学省 平成25年12月
- ・「平成26年度 小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会 実施要項・関係資料」  
文部科学省 平成26年11月
- ・「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」 国立教育政策研究所  
平成23年7月
- ・「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」  
文部科学省 平成24年12月
- ・平成15年度東京都教職員研修センター紀要第3号 平成16年3月
- ・「通級指導学級での指導の開始・終了判定システムの構築に関する調査研究事業報告書」  
東京都教育委員会 平成21年3月
- ・平成25年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」結果 東京都教育委員会
- ・平成26年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」結果 東京都教育委員会
- ・平成25年度「全国学力・学習状況調査」結果 文部科学省
- ・平成26年度「全国学力・学習状況調査」結果 文部科学省
- ・「自信 やる気 確かな自我を育てるために【基礎編】」 東京都教職員研修センター  
平成23年3月
- ・「自信 やる気 確かな自我を育てるために【発展編】」 東京都教職員研修センター  
平成24年3月
- ・「高校生の心と体の健康に関する調査報告書」 日本青少年研究所 平成23年3月

等